

春風・ピンチ・なう

アリセ・ハルカゼ・プロジェクトその②

言われないと道だと分からないような草むらをペンライトの明かりが明滅している。ゴスロリ少女有瀬春風は拙い光を片手に、何も持たず先を歩く男の後を必死に追いながら話しかける。

「ライブ用のペンライトをとりあえず持ってきててよかった。それにしてもスマホのバッテリーが切れるとか私って本当についてない。おじさん建物付いたら充電させてもらえますか」

有瀬春風は自称薄幸の美少女である。主に彼女の振る舞いや不準備のためであるが、少女は度々トラブルに巻き込まれている。『トラブルは乙女の宿命』母の言葉その2を励みに不幸の一言で片づけ反省しないので、今日もまた酷い目に合うことになる事を彼女はまだ気づいてない。

「すまないけど今は断線してて電気がないんだ。君みたいな小さい子もスマホみたいな高級品を使うようになるなんて時代もすすんだなあ。」

地面の凹凸や歩を邪魔する枝を気かけず暗闇を縫うように進みながら、少女の愚痴を男性は適当な相槌で返す。

「それにしても本当にこの先であってらるんですか。もう結構歩いてるし、立ち入り禁止の柵みたいなのもあったじゃないですか」

徐々にスピードが上がっていく男に追いつこうと足元を照らすのをやめ、歩をさらに早めて追いつこうとする春風。

「ああ、大丈夫だよ。もとは登山口だったんだけど事故があって復旧作業中なんだ。それでもそれなりに有名なスポットだからああやって注意をあおっているんだ」

「そういえばこら辺の話をテレビで見た気がするんですよねえ。なんだったっけ。昔のことだから内容が」

そして春風は小さく悲鳴を上げる。踏み下ろした左足の左半分が地を捉えなかったのだ。間一髪のところまで左手で木の幹を押し体を支える。その様子に気づいていないのかそれとも無視しているのか男はさらに進んでいく。

「ちょ、ちょっと待ってください、手を貸してくださいよ。こ、これはマジで死ぬ」

声を受け男は止まり振り返りはするものの、春風のもとに急いではやってこない。結局一人で体勢を立て直し少女は何も言わずに回れ右をするが、もと来た道が分からずもう一度まわる。

「おじさん、もとの場所まで連れて行ってくれませんか」

「ここまで来たらあと少しだから頑張ろう。そもそもさっきの場所にいてもどうしようもないんだろう。寒さがしのげるところで一晚過ごした方が建設的だと思うな」

「それじゃあせめてゆっくり歩いてくださいよ。あとナビとかしてくれないと本当に困ります。ただできえ歩きにくい恰好なんですよ」

「すまなかったね、気を付けるよ。そうだ、この先にぬかるみや沼があるから足元に一層気を付けたほうがいいね。一応板が引いてあるからその上を歩くようにしてくれ。それと少し休んでいこう」

そう言って男性は春風の斜め前を指さす。そこをペンライトで照らすと丸太のような長い筒状のものが横たわっていた。渋々そちらに移動した少女はざらざらした筒に腰掛け、鞆から銀色の水筒を取り出し一息つく。

「おじさんも少し飲みますか」

「いや、結構だ。それにしても水筒は機能的なのを使っているんだね」

「あ、分かります？この水筒が匂い移りもしないし保温性もばっちりなんですよ」

男の言わんとすることにも気づかず言葉を返し、紅茶を口に含み春風は空を見上げる。

「すごく星がきれい、本当に都内だとは思えない。人が来るのも分かる気がします」

鬱蒼とした地面とは対照的に、何物にも邪魔されない天空には星々が爛々と輝いていた。彼方まで続いているかのように広がるも、手を伸ばせば届きそうな存在感を持ち迫ってくる星々に乙女の心は囚われてしまう。

「あの上の方にあるのがカシオペア座だから、その少し下にある細々したのがペルセウス座で」

「星座に詳しいんだね」

「それはまあ、乙女のたしなみですから」

鼻唄交じりに星々を繋ぎ白ロリ少女は星座を紡ぐ。男はその様子を静かに見つめ、少女の手が止まってから口を開いた。

「それじゃ、名残惜しいかもしれないけどそろそろ出発しようか」

少女はスカートを軽くはたいて男の方へと近寄る。

「そうですね、もう少しらしいですしちゃちゃっと行きましょう」

そして二人は再び薄暗い森を進み始めた。

プレハブ小屋の片隅でぼろぼろの毛布に身を包み有瀬春風は震えていた。申し訳程度に敷かれた薄い畳もひんやりとしていてとてもじゃないが寝れる環境ではないので何かないものかと三度狭い部屋の中を見回す。部屋の中央に置かれたランタンの炎が質素なプレハブ小屋をぼんやりと照らしているが、ランタンが置かれた丸テーブルの他には入口のそばの工具や作業道具などが置かれた棚くらいしか見当たらない。

「やばい寒い。おじさんとロッジに行くが正解だったのかな」

休憩してから10分ほどで二人は木製のロッジと二階建てのいかにも無骨なプレハブ小屋のある開けた場所に出た。

「それじゃあ、寒いしロッジに行こうか。何度も言うがおじさんに君を襲うような体力はないから安心しておくれ」

「でも私、プレハブ小屋の方がいいです。だってあっちの方が風を通さないからあったか

いじゃないですか」

「君がそう思うのなら別にかまわないが、、一階が事務所で二階が宿直室なんだ。多分誰もいないから二階で寝るといい。怖くなったり寂しくなったらいつでもロッジに来てもいいからね」

そういつて別れたのがほんの数分前であった。さすがにこんな早く音をあげてしまつては沽券に係わると意地を張っていたのだが

「さすがに無理。これはまじで死んじゃう。室内で凍死とかマジでわけわかんない。いつでも来ていいつて言つてたし向こうに移動しようつと」

意を決して立ち上がり、毛布をロープのように体に巻きつけてランタンを手にする。

「ん、なにこれ」

ランタンを付けた時には気付かなかつたが丸テーブルの上には古びて埃のかぶつたノートが置かれていた。表紙にはマジックで業務日誌と使い始めの日にちが書かれていた。

「なんで5年前から使つているのよ。きっと担当が怠惰か書けないことが多いのね。そうだ、おじさんにちくっちゃおう。このプレハブ小屋も寒くて手抜き工事だし、私の推理ではこの業者は手抜き工事をしていて架空請求をしているに違いないわ」

壮大な誤解をして少女はノートを鞆に突っ込みプレハブ小屋を後にした。